

教育実習中の自覚症状・不安の増加に関連する要因について

朝倉 千晶* 天野 佑紀* 妙楽 真悠子*
多曾田 理恵* 古舘 美咲* 桜木 惣吉**

*卒業生

**養護教育講座

Factors Related to the Increase of Subjective Symptoms and Anxiety during Teaching Practice Period

Chiaki ASAKURA*, Yuki AMANO*, Mayuko TAERA*,
Rie TASODA*, Misaki FURUTATE* and Sokichi SAKURAGI**

*Graduate, Aichi University of Education

**Department of School Health Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

教員を目指す学生にとって、教育実習は必修科目であり、教育実習を経験することは将来教員になるうえで大きな学びになる一方で、体力的にも精神的にもかなりのストレスがかかると思われる。しかし、同じように教育実習を経験してもその程度には個人差があると考えられる。そこで本研究では、Cornell Medical IndexおよびState-Trait Anxiety Inventoryを用いて被験者の自覚症状・不安を評価し、教育実習中の出来事・家庭環境・生育環境・支援ネットワーク・コーピング手段・性格傾向に着目し、教育実習中の自覚症状・不安の増加に関わる要因についてスピアマンの順位相関係数により検討した。

キーワード：教育実習, CMI, STAI, スピアマンの順位相関係数

I. はじめに

教員を目指す学生にとって、教育実習は必修科目であり、一般的には2~4週間の期間、実際の教育現場で実践的に教員の仕事を学ぶ。教育実習を経験することは、将来教員になるうえで大きな学びになる一方で、大学での授業とは大きく異なり、体力的にも精神的にもストレスがかかることが多い。その結果、様々な症状を自覚したり、不安を感じたりする。その原因は、普段とは生活リズムが変わることであったり、慣れない環境で過ごすことであったり、教師や子どもとの関係づくりであったりと、様々である。また、同じように教育実習を経験しても、ストレスを強く感じる人やあまり感じない人、逆にストレスが軽減する人がいる。

教員はストレス状態におちいりやすい職業であり、将来教員になる予定の学生にも、自分自身のストレスをコーピングしていく力が求められる。そのためにはまず、ストレスの要因について知ることが大事であ

る。本研究では、ストレス状態の指標を得るために、Cornell Medical Index (CMI)^{1) 2)} およびState-Trait Anxiety Inventory (STAI)³⁾を用いて被験者の自覚症状・不安を評価し、ストレスの程度を目安とした。また、質問紙調査により、教育実習中の出来事・家庭環境・不快感・生育環境・支援ネットワーク・コーピング手段・性格傾向を調べ、教育実習中の自覚症状と不安の増加に関わる要因について検討することとした。

II. 対象及び調査方法

本研究では、平成27年度後期教育実習に参加した大学3年の20~22歳の女子学生18名を対象として調査を行った。全員が9月第4週から10月第3週までの約4週間、小学校で養護実習を行った。調査は1人につき2回行った。第1回は平成27年10月10日から10月18日の土日に、第2回はその4週間後の土日の同じ時間帯に、愛知教育大学養護教育棟2号棟1階の桜木研究室におい

て実施した。本研究では、調査をおこなうにあたって以下のように条件を設定した。被験者全員に対して、当日の服薬及び調査の3時間前から絶飲食とした。また、調査の前夜は大量の飲酒や激しい運動及び服薬を禁止し、6時間以上の睡眠をとるように指示した。室温は、22度±2度の範囲になるようエアコンディショナーを用いて調節した。また、騒音については調査日が休日だったこともあり、調査場所の周辺および養護教育棟2号棟に人が出入りしなかったため、静かな環境に保つことができた。

CMIは、ニューヨークのコーネル大学のブロードマン (Brodman) やウォルフ (Wolff) らによって、患者の心身両面にわたる自覚症状を、比較的短期間のうちに調査をすることを目的として考案された質問紙法のテストである¹⁾。わが国では金久卓也が、深町建とともにその日本語版をつくり、その後臨床上必要と思われる質問項目をいくつか追加したが、これが現在わが国でもっとも広く用いられているCMI日本語版²⁾である。日本語版には内科外来患者を対象に作成された神経症判別図が含まれており、学校や職場の精神衛生管理などにも広く活用されている。採点は自覚症プロフィールを用い、A～Lの項目に「はい」と答えた数を合計し、身体的自覚症の得点とした。またM～Rの項目に「はい」と答えた数の合計を精神的自覚症の得点、C、I、Jの項目に「はい」と答えた数の合計を心身症傾向の得点とした。

STAIは、状態不安と特性不安の2つの不安の程度をそれぞれ20項目の回答から得点化することができる質問紙調査である。スピルバーガー (1966) の理論によると、有害なものとして判断したときに短時間に誘発される不安状態を状態不安 (State Anxiety)、人格とも言うべき生来もっている不安を特性不安 (Trait Anxiety) と呼ぶ³⁾。状態不安については、「いま不安によってどのようになったのか、特性不安は「いつも」どうなっているのかの不安尺度を問うものである。

【教育実習中の出来事】については、今林俊一、川畑秀明、有馬博幸が作成した「教育実習ストレス尺度」を基に、教育実習で起こった事柄を質問した⁴⁾。「指導案や教材の作成に苦労した」「児童の状態や気持ちを把握することができないことがあった」などの全22項目について、【3. あてはまる 2. ややあてはまる 1. あまりあてはまらない 0. あてはまらない】の4段階で回答を得た。①指導案等基本的事項については【1. 指導案や教材の作成に苦労した 2. 実習の進め方がわからないことがあった】の6点満点、②実習中の生活については【3. 遅くまで学校に残ることがあった 4. 自分のペースで作業を行えないことがあった】の6点満点、③気遣いなどの精神的疲労については【5. 休憩する場所や時間厳守などの規則に気がつかうことがあった 6. 校内での些細な言動や態度に気がつかう

ことがあった 7. 生活時間が不規則になり、体調に気がつかうことがあった 14. 教員の機嫌が悪かったり、接し方に気がつかうことがあった】の12点満点、④教員とのことについては【8. 教員から作業に関して過大な要求をされることがあった 9. 教員が指示した内容や指導方法に対して疑問を抱くことがあった 10. 教員の指示が理解できなかつたり、一貫していないことがあった 11. 教員との連絡が密でなく、指導をしてもらえないことがあった 12. 教員に自分の失敗や欠点を指摘されたことがあった 13. 教員に悪口や嫌味を言われることがあった】の18点満点、⑤児童とのことについては【15. 児童にまわりつかれたり、一緒に遊ばなければならないことがあった 16. 児童との会話で話題に困ることがあった 17. 児童が指示に従わなかつたり、言うことを聞いてくれないことがあった 18. 児童の状態や気持ちを把握することができないことがあった 19. 児童に自分の失敗や欠点を指摘されることがあった 20. 接し方に気がつかわなければならない児童がいた 21. 教員や実習生を馬鹿にしたり、生意気な態度をとる児童がいた 22. クラスがまとまらなかつたり、児童同士が対立することがあった】の24点満点に分類し、それぞれの合計得点で分析した。

【家庭環境】については、本研究のために、杭瀬智子氏と三澤咲美氏の「日本における家族特性評価尺度」を基に作成した、被験者の家庭環境についての質問紙で調査した⁵⁾。「家族に笑顔が絶えない」「家事を分担しておこなっている」などの26項目について、【3. あてはまる 2. ややあてはまる 1. あまりあてはまらない 0. あてはまらない】の4段階で回答を得た。全26問の項目を、①家庭の中が明るいについては【1. 家族に笑顔が絶えない 2. 私の家族は明るい雰囲気を持っている 3. 家族の間での会話が多い 4. 私の家族は仲がよい 5. 親子のふれあいが多い 6. 家族とのコミュニケーションがいつも取れる】の18点満点、②家族が信頼しあっているについては【7. 家庭内で必要ときに適切な助言・援助が得られる 8. 家族にはなんでも相談できる 9. 家族の中で悩んでいる人がいるとお互いに励ましあう 10. 言葉に出さなくても思いが通じることがある 11. 家族に自分のことを理解してもらっていると感じる 12. 家族で起こった問題を話し合いで解決することができる】の18点満点、③家族で一緒に行動し、協力しあうについては【13. 家族で外出することがある 14. 私の家族はそろって旅行することがある 15. 家族の誕生日や結婚記念日などの記念日をみんなで祝う 16. 家族みんなで食事をする 17. 家事を分担しておこなっている 18. 私の家は家庭内でルールがある 20. 家族で会議を開くことがある】の21点満点、④家族は私に理解があるについては【19. 親が子どもに甘い 21. 子どもが親

の手伝いをする 22. 家族がお互いに束縛しあわない 23. 私の家族はお互いに依存しすぎない 24. 私の家族は何事も他人と比較しない 25. 親が子どもの成績についてこだわらない 26. 生活のうえで親が注意をしてくることが多い】に分類し、それぞれの合計得点で分析した。

【不快度】については、本研究のために、菊島勝也氏が作成した「大学生ストレス尺度」を基に、不快であると思う項目についての質問紙を作成し、調査した⁶⁾。「家族の中でもめごとが起きる」「友人と話が合わない」などの37項目について、【3. とても不快 2. やや不快 1. あまり不快ではない 0. 全く不快ではない】の4段階で回答を得た。「何を不快と思うか」という全37問の項目を、①家族とうまくいかないについては【1. 家族の中でもめごとが起きる 2. 家族に自分のやりたいことを反対される 3. 家族から納得できないことを反対される 4. 家族と意見が合わない】の12点満点、②親とうまくいかないについては【5. 親に言いたいことが言えない 6. 親に反対される 7. 門限など家のルールが厳しい 8. 親にいろいろと詮索される 9. 親にいろいろなことで口出しされる 10. 親から一方的に指図されたり頼まれたりする】の18点満点、③友人とうまくいかないについては【11. 友人と話が合わない 12. 自分が相手にどう思われているか気になる 13. 友人に納得できないことを言われた 14. 友人に気を遣ってしまう 15. 友人ができない 16. 友人との接し方がわからない 17. 友人に言いたいことが言えない 18. 友人と自分を比較してしまう 19. 友人に誤解される 20. 友人ともめてしまった 21. 友人と打ち解けられない】の33点満点、④大学生活に疲れているについては【22. 多くの授業・実習に出なければならない 23. 気の合わない先生がいる 24. 時間に追われている 25. 授業や課題、試験勉強などで忙しい 26. 授業の内容がわからない 27. 毎日なにかと忙しい 28. 授業に興味がない 29. 学食などの大学の施設に不便を感じる】の24点満点、⑤大学がつまらないについては【30. 将来の見通しが立たない 31. 思っていた大学生活ではなかったと思う 32. 大学にいる意義が見出せない 33. 毎日が単調】の12点満点、⑥将来に対する不満があるについては【34. 自分が何をやりたいのかわからなくなる 35. 先生や職員と話づらい】の6点満点、⑦アルバイトに不満があるについては【36. アルバイトがつまらない 37. アルバイトが忙しい 38. アルバイト先の人間関係がうまくいかない】の9点満点に分類し、それぞれの合計得点で分析した。

【生育環境】については、本研究のために独自に作成した、被験者が育った環境についての質問紙調査である。【1. 小学校時代及びそれ以前 2. 中学校時代及びそれ以降】それぞれについて、【1. あなたの父親は厳

しかったですか 2. あなたの母親は厳しかったですか 3. あなたの父親は口うるさかったですか 4. あなたの母親は口うるさかったですか 5. あなたの父親は神経質でしたか 6. あなたの母親は神経質でしたか 7. あなたの父親は過保護でしたか 8. あなたの母親は過保護でしたか 9. 近所の同年代の子とよく遊びましたか 10. 親に、兄弟姉妹や友人と比較されていましたか】の10項目を、【1. とても厳しかった 2. やや厳しかった 3. あまり厳しくなかった 4. 厳しくなかった】などの4段階で回答を得た。

【支援ネットワーク】については、本研究のために宗像氏ほかの「支援ネットワークの分類と内容」を基に作成した、被験者の周りのサポート状態についての質問紙で調査した⁷⁾。【手段的支援ネットワーク：1. 経済的に困っているときに、頼りになる人 2. あなたが病気で寝込んだときに、身の回りの世話をしてくれる人 3. 引越しなければならなくなったときに、手伝ってくれる人 4. 分からないことがあるとよく教えてくれる人 5. 家事をやってくれたり、手伝ってくれる人】、【情緒的支援ネットワーク：6. 会うと心が落ち着き、安心できる人 7. 気持ちの通じ合う人 8. 常日頃あなたの気持ちを敏感に察してくれる人 9. あなたを日頃認め、評価してくれる人 10. あなたを信じてあなたの思うようにさせてくれる人 11. あなたの喜びを我が事のように喜んでくれる人 12. 個人的な気持ちや秘密を打ち明けることのできる人 13. お互いの考えや将来のことなど話し合える人】の13項目について、【1. いる 2. いない】の2段階で回答を得て、それぞれの合計得点で分析した。

【積極的コーピング】については、本研究のために宗像氏ほかの「積極的・効果的対処行動尺度」を基に作成した、被験者がストレスを感じたときの行動についての質問紙で調査した⁷⁾。【1. 信頼できる人に相談する 2. それを人に話し、気持ちをわかってもらう 3. 友人に助言を求めたり、助けてもらう 4. 人から問題解決の手がかりを求める 5. 気分転換のために軽い運動をする 6. 見通しを得るためにしばらく離れてみる 7. それをやりに終えたとき、自分になにかほらうびをあげる 8. それをあまり心配するほどのものではないと決める 9. 自分の不快な気分や怒りを人に知ってもらう 10. いろいろ考え、その状況の見方や自分の考え方を考えてみる 11. 新しいことを取り組む前に、見通しや計画を立ててみる 12. 仕事が多すぎたり、忙しすぎたりすれば、そのことを人に伝える】の12項目について、【1. たいてい 2. しばしば 3. あてはまらない】の3段階で回答を得て合計得点で分析した。

【消極的コーピング】については、本研究のために宗像氏ほかの「消極的・悪循環的対処行動尺度」を基に作成した、被験者がストレスを感じたときの行動に

についての質問紙で調査した⁷⁾。【1. チャレンジすることや新しい場所を避けようとする 2. 前もって計画を立てたり、困難を予期したりするのは難しいと思う 3. 大きな仕事をさげようとして、より小さい仕事をみつけようとする 4. 物事に感情的に巻き込まれないようにする 5. どのように一生懸命やっても、自分の望むことを達成できない 6. 解決できそうもない問題に首を突っ込むことが多い 7. 人と意見が食い違うのは好きではない 8. 怒りを抑えたり、欲求不満をためたりする 9. 機嫌が悪いと、つい人を責めてしまう 10. 泣きわめいたり、取り乱したりして自制を失ってしまう 11. 駆り立てられているような気がする 12. 何でも一人でやろうとする 13. 物事に取りかかる前にいろいろと心配する 14. 自分の達成したものにあまり満足しない 15. 物事をし終えるのにいつも時間が足りなくなってしまう 16. スリルや緊張感のある行動をする 17. おいしいものを食べたり、やけ食いする 18. 買い物などをして気を晴らす 19. ものを投げたり、壊したりしてうっづきを晴らす 20. 問題にかかわりがあった人に腹を立て、責任を転嫁する 21. アルコールを飲んだりして憂さ晴らしをしたり、友人とばか騒ぎをする 22. たばこを吸って気をまぎらす】の22項目について、【1. たいてい 2. しばしば 3. あてはまらない】の3段階で回答を得て合計得点で分析した。

【性格傾向】については、MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory)^{8) 9)}を実施し、以下の10の臨床尺度により評価した。MMPIは、550項目の精神的・身体的健康および家族・職業・教育・性・社会・宗教・文化等についての態度に関する各項目の自己叙述文について、被験者に「どちらともいえない (Cannot say)」をできる限り少なくするように、「あてはまる (True)」か「あてはまらない (False)」

か、を答えてもらい評価する、質問紙法による人格検査 (人格目録) である。MMPIの臨床尺度は【第1尺度：Hs (hypochondriasis；心気症)、第2尺度：D (depression；抑うつ)、第3尺度：Hy (hysteria；ヒステリー)、第4尺度：Pd (psychopathic deviate；精神病質的偏奇)、第5尺度：Mf (masculinity-femininity；男子性・女子性)、第6尺度：Pa (paranoia；パラノイア)、第7尺度：Pt (psychasthenia；精神衰弱)、第8尺度：Sc (schizophrenia；統合失調症)、第9尺度：Ma (hypomania；軽躁病)、第0尺度：Si (social introversion；社会的内向性)】の10尺度である。

分析は各指標の実習中の値から実習後の値を引いた値を求め、エクセル統計を用いて各要因とのスピアマンの順位相関係数を計算して、それぞれの関連を検討した。統計学的検定は、 $p < 0.05$ を有意と考えた。

Ⅲ. 結果及び考察

1) 実習期間中の自覚症状の増加とそれに関連する要因について

身体症状は、期間中は期間後に比べ有意に多く (18.278 ± 2.045 vs 14.944 ± 1.969 (mean \pm SE), $p=0.0008$) また逆に、期間後に症状が増加した者は18名中1名であった。身体症状の増加には、【教育実習中の出来事】の内②実習中の生活が有意に関連していた ($r = 0.5313$, $p < 0.05$)。実習中の生活には『遅くまで学校に残ることがあった、自分のペースで作業を行えない』の項目が含まれており、実際に身体的負荷が実習期間中に増加しており、その結果、身体症状が増加したと推定される。家庭環境・不快感・生育環境・支援ネットワーク・対処行動・性格傾向については、有意に関連する項目はなかった。精神症状は、期間中は期間後に比べ有意に多く [7.500 ± 1.334 vs 5.056 ± 0.944

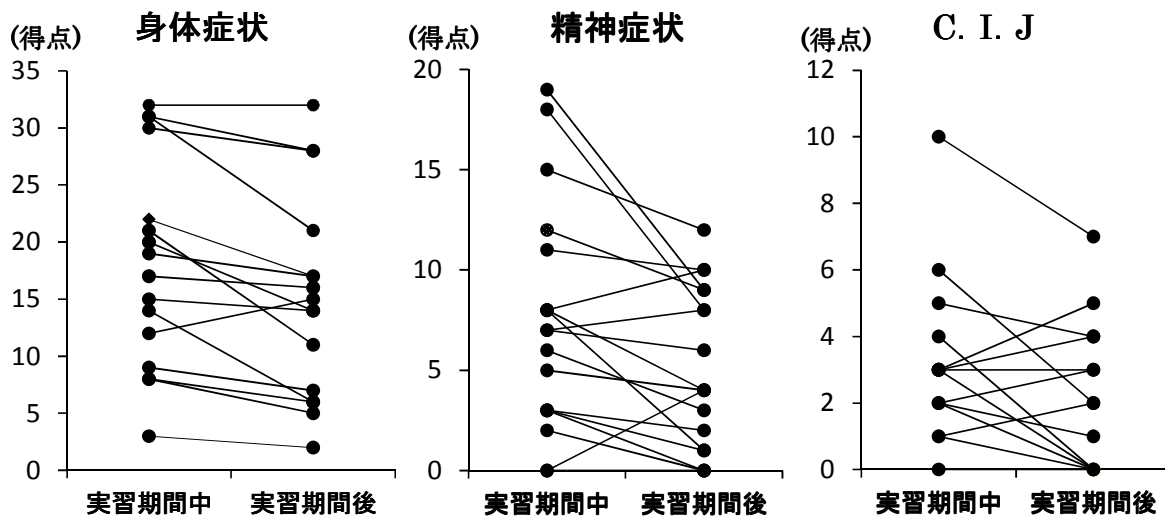


図1. CMIで測定した身体症状、精神症状、C.I.J (心身症傾向)の実習期間中、期間後の変化

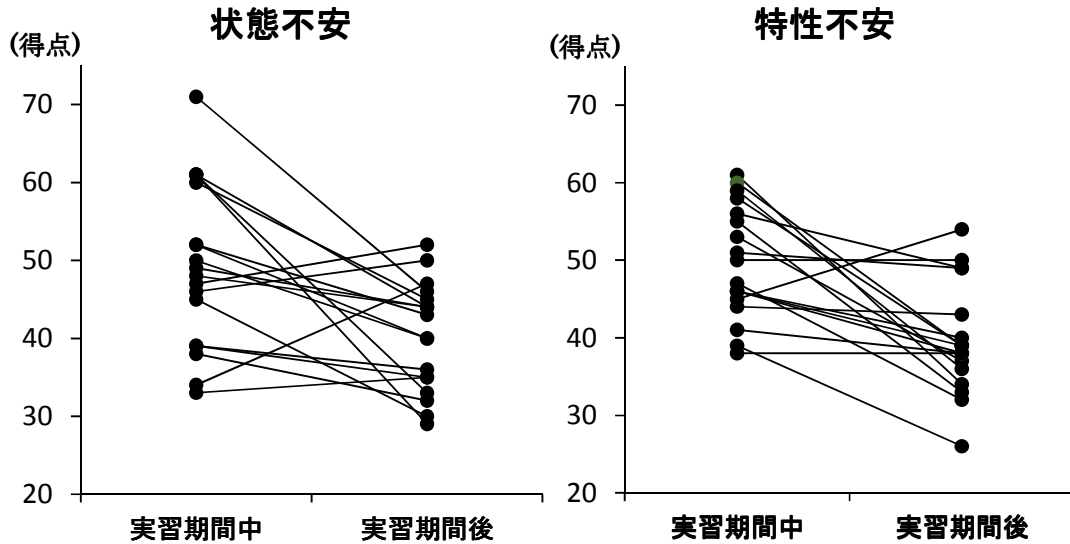


図2. STAIで測定した状態不安, 特性不安の実習期間中, 実習期間後の変化

(mean ± SE), $p=0.0113$], また逆に, 期間後に症状が増加した者は18名中3名であった。また, 精神症状の増加に有意に関連する項目はなかった。精神症状の原因は様々であり, 個人差も大きいため, 多くの被験者に共通するような要因は, 見出されなかったと考えられる。心身症傾向 (C.I.J) は, 期間中は期間後に比べ有意に多く (2.889 ± 0.548 vs 1.944 ± 0.514 (mean ± SE), $p=0.0396$) また, 期間後に症状が増加した者は18名中5名であった。C.I.Jの増加には, 【不快度】の内⑥将来に対する不安がある ($r = -0.4697$, $p < 0.05$), および【生育環境】の内10.よく比較される (小学校まで: $r = 0.5570$, $p < 0.05$; 中学以降: $r = 0.6469$, $p < 0.01$) が有意に関連していた。相関係数が-なので, 将来に対する不安がある人ほど実習期間中の神経症傾向の増加が少ないことになる。将来に対する不安がある人は普段から神経症傾向が強いと推定されるため, 逆に実習期間中の増加は少なかったのかもしれない。また, 今までに人とよく比較されて育ってきた人は, 対人関係に敏感になりやすく, そのため実習期間中の神経症傾向の増加が多かったと思われる。

2) 実習期間中の不安の増加とそれに関連する要因について

状態不安は, 期間中は期間後に比べ有意に多く (49.222 ± 2.483 vs 40.278 ± 1.627 (mean ± SE), $p=0.0051$) また逆に, 期間後に状態不安が増加した者は18名中4名であった。状態不安の増加には, 【家庭環境】の内①家庭が明るい ($r = 0.5358$, $p < 0.05$), 【生育環境】の内母が神経質 (小学校まで: $r = -0.6024$, $p < 0.01$; 中学以降: $r = -0.6049$, $p < 0.01$), また【性格傾向】の内D ($r = -0.4784$, $p < 0.05$), Pt ($r = -0.5282$, $p < 0.05$), Sc ($r = -0.5687$, $p < 0.05$) が有意に関連し

ていた。家庭が明るいほど, 実習期間中は普段との落差が大きいため, より多くの不安を感じたと考えられる。逆に, 母が神経質だと普段から不安が多く, その結果, 実習期間中の不安の増加は少なかったと考えられる。また, 性格傾向では, MMPIの臨床尺度でD, Pt, Scと有意な負の関連が見られた。第2尺度 (D) は本来, 症状性抑うつを査定するために作成された尺度で, 被検者が生活状況において感じている不快感や不満足感を捉えるに優れた指標である。高得点を取る人の特徴は憂うつ感, 抑うつ感, 不幸福感をもつであり, 低得点を取る人の特徴は緊張, 不安, 罪責感, 憂うつ感情等はみられず, 緊張がほぐれて, くつろいでいる, 自信があり, 情緒的に安定している, である。第7尺度 (Pt) は, 強迫的な思考, 恐怖感とか不安感, 自分の能力に対する疑問等を取り上げている。不幸福感, 身体的訴え, 集中困難等もこの尺度に取り上げられている。高得点を取る人の特徴は身体的動揺と不快感を体験している, 不安で緊張が強く, 焦燥的である, である。低得点を取る人の特徴は有能で, よく適応している, ひどい恐怖や不安感を持たない, である。第8尺度 (Sc) は奇異な行動, 知覚異常, 被害妄想, 幻覚など, はっきりとした精神病症状を取り上げている項目の他に, 社会的疎外, 家族関係の不和, 性的関心, 衝動統制困難, 集中困難, 恐怖, 悩み, 不満足感などである。高得点を取る人の特徴は, 錯乱, 混乱, 失見当識, 異常な思考や態度, 妄想, 幻覚, である。低得点を取る人の特徴は, 人当たりが良い, 陽気, 温厚, 敏感, 人を信頼する, 落ち着いていて順応性がある, である。性格傾向のD, Pt, Scの得点が高い人は抑うつの傾向で, 不安・緊張が強く, 混乱している傾向があり, 普段から高不安の可能性が高く, そのため実習期間中の不安の増加は少なかったと考えられる。

特性不安は、期間中は期間後に比べ有意に多く (49.722 ± 1.715 vs 39.667 ± 1.667 (mean \pm SE), $p=0.0005$) また逆に、期間後に特性不安が増加した者は18名中1名であった。特性不安の増加には【不快度】の内、④大学生活に疲れている ($r = -0.5212$, $p < 0.05$) が有意に関連していた。特性不安は、本来短期的に変化するものではないが、今回のように持続的にストレス状態に置かれると、その状況を反映して変化すると考えられる。大学生活に疲れている人は、実習前から持続的なストレス状態にあると推定されるため、今回の実習による変化は僅かであったと推定される。

今回の調査で得た質問紙調査の回答は、あくまで被験者の主観であり、客観的な程度はわからない。また、実習前の状態についての調査をしていないため、実習後に元の状態に回復しているかどうかは不明であり、実習中の影響が実習後も継続している人もいるかもしれない。今回の分析では、実習終了後2~3週間後には、ほぼ持続的ストレス状態からは解放されていると仮定して分析しているため、結果の解釈には慎重でなければならない。

IV. おわりに

教育実習は、教員を目指す学生にとって必須の科目であり、また、実際の教育現場で児童生徒や現場の先生方と関わりながら行っていくため、大学での授業とは大きく異なり、様々な心理社会的ストレスを受け、その結果、身体的・精神的自覚症状の増加や不安の増加を来すことが多い。そのため、これらに関連する要因を知ることは、実習中のストレス軽減に少なからず寄与すると考えられる。

V. 謝辞

本研究は、第一筆者～第五筆者が共同研究を行い、最終筆者が指導した平成27年度愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を、加筆・修正したものです。実施にあたり、調査に被験者としてご協力いただきました学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

VI. 参考文献

- 1) Costa PT Jr., McCrae RR. Psychiatric symptom dimensions in the Cornell Medical Index among normal adult males. *Journal of Clinical Psychology* 33: 941-946. 42. 1977
- 2) 金久卓也, 深町 建, 野添新一: コーネル・メディカル・インデックス その解説と資料, 京都, 三京房. 2001
- 3) Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., and Lushene, R. E.. *The State-Trait Anxiety Inventory: Test Manual*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologist Press. 1970
- 4) 今林俊一, 川畑秀明, 有馬博幸: 教育実地研究に関する教

育心理学的研究 (7). 2007

- 5) 杭瀬智子, 三澤咲美: 日本における家族特性評価尺度の作成. 2003
- 6) 菊島勝也: 大学生用ストレスサー尺度の作成. 2002
- 7) 河野友信, 石川俊男: ストレスの事典, 朝倉書店, 2005
- 8) MMPI 新日本版研究会編: MMPI マニュアル, 三京房, 1993
- 9) 田中富士夫: MMPI による心理査定. 三京房, 1999

(2016年9月21日受理)